マリ・パップ＝カルパンティエとルイーズ・ミシェルにとっての自然誌

金　山　富　美
（島根大学）

Value of Natural History for Marie Pape-Carpantier and Louise Michel

Fumi KANAYAMA
Shimane University

Abstract

Marie Pape-Carpantier, the pioneer of pre-primary education in France produced many textbooks for teachers as well as mothers. One of her earliest and most important books "*Histoire et leçon de choses pour les enfants*" focuses on object lessons and the education of senses. Starting from this manual, she endeavored to write plenty of stories about animals and other natural histories in most of her books such as "*Secret des grains de sable*" and "*Zoologie des écoles*". It may be considered as the first opened door to the science and contemporary knowledge for many poor children and women in France, before the Minister of Public Education set to create the modern Republican school.

Louise Michel must have learnt with Pape-Carpantier's books to see any child as developing beings, while teaching as a free school teacher in the Montmartre poverty district. Confronted with class distinctions and its struggles showing more or less the law of the jungle, these experiences could have prompted her to become a more animated instructor and one of the most brave revolutionaries.

In this paper, I analyze the meaning of natural history and natural science proposed by Pape-Carpantier and Louise Michel's consideration.

１．はじめに

あらゆる領域を教会が支配していた「カトリックの長女」フランスにおいても、19 世紀には初等教育、女性教育が順次整えられ、男性指導者の中に女性の姿も見られ始める。なかでも、マリ・パップ＝カルパンティエ（1815-1878）は公教育、ルイーズ・ミシェル（1830-1905）は私塾という違いはあるが、二人はもっとも初期の頃、その現場に身を置いた女性の代表格といえる。

パップ＝カルパンティエは、わが国ではほとんど知られていないが、ヨーロッパの女性教育者の草分けの一人である。七月王政期から第二共和政、第二帝政を経て第三共和政期まで、保育及び初等教育、さらに一時期ではあったが中等教育の発展にも大きく寄与し、庶民の出自でありながら保育所総視学官として活躍した。1867 年のパリ万博では、文相ヴィクトル・デュルイの信頼に応えて女性として初めてソルボンヌ講堂に立ち、一時は広くヨーロッパ教育界でフレーベルの右に並ぶほどの評判を得る。

他方ルイーズ・ミシェルは社会革命、戦争反対を旗印にアナーキストとして活躍し、数々の勇気

ある行動とその寛大さで、今もフランスの人々の記憶に残る。わが国では大佛次郎作『パリ燃ゆ』でパリ・コミューンの女性闘士として語られるが、実はこの人も多くの年月を教師として過ごした。

本稿では、パップ＝カルパンティエ（以下カルパンティエと記載）とルイーズ・ミシェル（以下ミシェルと記載）が教育現場で用いた自然誌をめぐって、二人が自然誌のいかなる点に価値を見出し、それぞれがそこにどのような意味を与えていたのかについて探っていきたい。本考察を通して、いまだ研究が尽くされておらず、業績が十分認知されてはいない双方の人物に新たな光を当てるとともに、従来あまり検討されてこなかった自然科学と女性との関わりについても検討できるだろう。

２．初等教育への自然誌の導入

フランスにおける博物学（あるいは自然誌）は、18 世紀後半に『博物誌』を著したジョルジュ・ビュフォン（1707-1788）に牽引され、ジャン＝バティスト・ラマルク（1744-1829）、ジョルジュ・キュヴィエ（1769-1832）、ジョフロア・サン＝ティレール（1772-1844）によって発展を見る。なかでも、その分科の一つである動物学は、ヴェルサイユの王立メナジュリーがパリ国立自然史博物館のメナジュリーとなってから飛躍的に進歩し、人々の耳目を集めた。

当時の人々の動物に対する関心の高さは、たとえばバルザック（1799-1850）の『人間喜劇』にも垣間見ることができる。この壮大な文学構想は、小説家自らが「総序」（1842）に記すように、ビュフォンを強く意識し、動植物の分類に倣って人間の様々な類型を描写しようと試みたものでもあった。その代表作の一つ『ゴリオ爺さん』（1835）の献辞は自然史博物館教授であったサン＝ティレールに捧げられており、作品中にはパリのメナジュリーが登場する。

実際には、人々が動物を目にする機会は、その種類は限られていたもののすでに中世の頃から放浪芸人による巡回メナジュリーで提供されていた[1]。だが、動物をいかに把握するのかは、バルザックが文学で応用しようとした「生理学」の観点も含め、19 世紀の博物学の発展の中で新たな段階を見たと言える。イギリスでは『種の起源』（1859）が出版され、教会や保守層から嵐のごとき批判を受けている。

以上の背景からすれば、カルパンティエとミシェルが自然誌、特に動物を教育に活用したことを当然の流れだとみなすこともできる。しかし、当時の教育現場がどうであったかは別の問題であり、まずそれを押えておく必要があろう。

フランス公教育[2]の基盤となる初等教育に関して、その本格的な整備は、各市町村に男子校を開設するという 1833 年のギゾー法に始まる。一方、女子に対しては全く状況が異なっていた。7 月王政下という教会の影響力がまだ強い時代であったことが影響して、3 年後の 1836 年のプレ法によって初めて「市町村の随意」という条件付きで法令化、さらに 14 年後の第二共和政期、1850 年になってようやくファルー法が「住民 800 人以上の市町村（ただし、その行政の財源でまかなえることが条件）に女子小学校を最低一校設置する義務」を定めた。女子初等教育はさらに 17 年後の 1867 年、第二帝政下に文相に抜擢された自由思想家ヴィクトル・デュルイの初等教育法によって、「住民 500 人以上の市町村すべてに女子小学校最低一校の設置義務」という文言のもとに施行され、大きな一歩を踏み出したと言える。

この第二帝政期が、19 歳から現場経験を積んできたカルパンティエにとってもっとも脂がのった時期であり、彼女が教育界で八面六臂の活躍をしたこと、一方で皇帝ナポレオン三世に反発したルイーズ・ミシェルは、初等教育資格を取得しながらも皇帝への忠誠を拒んで私塾（自由学校）の教師となり、貧しい子供たちを相手に教育活動を展開し、それと並行して社会革命に目覚めていった時代であったことを記憶しておきたい。なお、現在につながる初等教育の義務（無償）化と非宗教については、パリ・コミューンの混乱を経た後、第三共和政下 1883 年のフェリー法を待たなければならない。

ここで、本稿で問題にしている自然誌、博物学的要素が初等教育に取り入れられたのが、どの時点からであったのかを確認する。サン＝ティレールが第一線で活躍し、バルザックが『人間喜劇』の著作に次々と着手、また新しい情報や知識に敏感な人々が動物に強い関心を寄せた 1830 年代、ギゾー法が初等教育に求めたのは「道徳・宗教教育、読み方、書き方、フランス語と算術の基礎、計量法」であった。約 20 年後のファルー法はギゾー法にほぼ準じたものだったが、ここで初めて必須科目として「物理・博物学的な実用基礎知識」の記載が現れる。1867 年の省令ではそこにフランス史と地理が加わるが、ただし「科学に関してはその限りではない」と明示された[3]。

「実用基礎知識」と「科学に関してはその限りではない」（＝科学は加えるには及ばない）という表現には、体制側の基本姿勢が見て取れる。つまり、初等教育に組み入れられた対象者のほとんどは労働者や農民の子供であるのだから、彼らの日常と将来も変わらぬ社会的職制に必要最低限の知識を超える学問は不要である、との認識である。実用に限定されない科学的知識の育成が初等教育に登場するのは、それから 15 年後となるフェリー法公布の前年、1882 年 7 月 28 日省令に至って初めて「事物の学習、日常的な事物の知識、博物学初歩」と読める。そして、さらに数年後の 1887 年 1 月 18 日省令でようやく「事物の学習と初歩の科学的知識を含む」と謳われた[4]のである。

さて、これらの文言からは、当時の初等教育において、「事物の学習」が科学につながる勉学であり、博物学の初歩とみなされていたことが読み取れる。また、ここまでの経緯を眺めれば、科学的知識の付与がいかに長い間一定以上の階級に限定される「権威的なもの」であったのかが、あらためて確認されよう。

ところで、上記「事物の学習 Leçon de choses」とは何だろうか。それは「実物教育」を意味し、より具体的に言えば、身の周りに存在する事物など「感覚しうる現実」の観察から出発して思考を学び、そこからより抽象的な世界や科学の世界へと誘う指導法[5]を言う。このことについてフェルディナン・ビュイッソン（1841-1932）は『教育学・初等教育辞典』（1887）に、「〈事物の学習〉という表現がわれわれの教育用語として入ってから、まださほど時は経ていない。それは、1867 年の万国博覧会の初等教育指導者を対象とした講演会で、パップ＝カルパンティエ夫人が用いたことで広く知られた」[6]と説明している。

ビュイッソンはフェリー法にその名を残すジュール・フェリー文相の右腕であり、上記 1882 年及び 1887 年の「事物の学習と初歩の科学的知識を含む」省令の作成に携わった人物である。彼が著書でこうしてカルパンティエの功績に触れるのは、第二共和政期にはカルノー文相、第二帝政期はデュルイ文相を大いに支え、カトリック教会のデュパンリュー枢機卿やブルジョワ保守層の目の

敵にされながらも 20 年以上の長きにわたり初等及び女子教育に尽くした彼女の献身に思いを馳せたからであろう。また、その実績にもかかわらず、第三共和政下フェリーの前任者ド・キュモンによって保育所総視学官を解任された彼女の不遇の晩年を痛ましく思ったためでもあったのか。いずれにせよ、自由主義的プロテスタント、ビュイッソンのその言葉は、第三共和政の名を冠するのにふさわしい初等教育が、カルパンティエの力なくしてはありえなかったと、彼が認めていることを伝える。

ビュイッソンの言葉通り、1867 年、カルパンティエがソルボンヌの演壇において、フレーベル法を基礎に自らが日々の現場で試行錯誤して編み出した幾何学に関する教育方法、「事物の学習」の詳細をデモンストレーションして大きな反響を呼んだことは事実である。たとえば「自然が産み出す結晶」など「身の周りにある素朴で楽しい遊び道具」は「子供に芽生える創造したいという欲求を満足させるのにうってつけの教育材料」[7]であるなど、様々な具体例を出しながら会場を埋めた教育者（そこに居合わせたのはほとんどが男性であった）に情熱的に語りかけ、彼らを新たな知見へと導いた。ただしビュイッソンの証言に反して「事物の学習」は、次頁の年表で示すように、実はソルボンヌ講演会の 10 年以上も前から、カルパンティエの教育指導書によって保育の現場、そして家庭でも、漸次認知されていたことを忘れてはならない。

それは、マーレンホルツ夫人（1810－1893）によってフレーベル法が紹介された 1855 年からわずか 3 年後のことで、カルパンティエはドイツとは歴史的にも文化的にも土壌が大きく異なるフランスで、当時、子供の教育を主に引き受けていた保育士や家庭の母親たちがフレーベル法を理解して指導できるように『子供のためのお話と事物の学習』（1858）を世に送っていたのである。そこには、小鳥、ネコ、ロバなど子供に身近な動物が題材として取り上げられ、子供と指導者がともにそれらを観察し、生態について学ぶことのできる短い物語、つまり博物学のひとつである動物学が収められている。

「事物の学習」は科学につながる勉学だと述べたが、もちろんそこに今日的な意味での科学や客観性をそのまま求めることはできない。しかし、無学がほとんど問題にされなかった労働者や農民の子供に対して、必ずしも実用に限定されない学習、言い換えれば観察力や論理的思考を促す科学的教育が、実質的にカルパンティエの働きかけによって実現の方向へと向かったこと[8]、しかも、その指導が草の根のように、母親を含む多くの女性指導者によって広く行き渡っていったことは、教育史には必ずしも記録されない事実であるからこそ重要である。

カルパンティエはソルボンヌ講演会の 2 年後の 1869 年、『子供のためのお話と事物の学習』の内容を大きく充実させて、そこに自身の教育哲学を盛り込んだ『学校と保育所と家庭の動物学―視覚による教育』全 5 巻を発表する。そこには家畜、野生動物、鳥類、爬虫類、両生類、魚介類、そして昆虫まで、あらゆる「動物」が網羅され、それらの生き物をめぐって子供（町の子供、田舎の子供）と大人（女性また男性の先生、母親、父親）との間の生き生きとした問答が展開される。この動物学が著者カルパンティエの死後なお、1914 年まで繰り返し継続して刊行されていることも、また無視はできない。

カルパンティエ及びミシェル関連年表[9]

第二帝政期　※◇はカルパンティエ（＝P-C）に関する事項、◆はミシェル（LM）について記す

1852-1854 年 ◆LM、故郷で私塾（自由学校）を開校
1855 年 ◇P-C、フレーベル教育法を保育所で活用開始
1856 年 ◆LM、パリに上京し、寄宿学校の助教に
1858 年 ◇P-C『子供のためのお話と事物の学習』を発表
1862 年 ◆LM は助教の職の傍ら、夜間学校で政治社会の勉強を開始
1863 年 ◇P-C『砂粒の秘密あるいは自然の幾何学』を発表
1865 年 ◆LM、モンマルトルのクロワ通りで私塾経営を開始
1866 年 ◇P-C『学校同盟』執筆に着手
1867 年 ◎デュルイ初等教育法：住民 500 人以上の市町村に女子小学校最低一校の設置義務
◇P-C、万国博覧会の国家行事としてソルボンヌ講堂で教育講演を実施
1868 年 ◇P-C、ソルボンヌ連合教師団の唯一の女性メンバーに、また保育所総視学官に任命される(～1874 年)。『保育教育入門講義：講演記録』を発表
◆LM、貧しい子供をより多く受け入れるために私塾をウド通りに移転
1869 年 ◇P-C『野生の動物』『地理学、博物学、最初の基礎知識』（地理・博物学者と共著）『学校と保育所と家庭の動物学―視覚による教育』発表
1870 年 ◇P-C『教師の手引』『女性教師の手引』発表
◆LM、私塾経営の傍ら、パリで頻発する各種デモに参加

第三共和政期

1871 年 ◆LM、コミューン宣言から間もなく社会主義と教育に関する著作を構想
◆LM、コミューン加担により逮捕され、ニュー＝カレドニアへの終身流刑が決定
1872 年 ◇P-C『文法、読解、書取り練習』（言語学者と共著）『家畜の話』『学校同盟』を発表
1873 年 ◇P-C『保育所と小学校と家庭の新しい形／視覚の教育』『麦物語』を発表
◆LM、先住民カナック族のための私塾を開校
1875 年 ◆LM『カナック族の伝説と武勲詩』を構想（帰国後の 1885 年に発表）
1876 年 ◇P-C『自然誌』を発表
1878 年 ◆LM、カナック族の反乱を支援
◇P-C『感覚教育と教育器材についての覚え書き』発表。P-C 死去
1879 年 ◆LM、流刑囚の子供のために首都ヌメアで私塾を開校
1880 年 ◆LM、ヌメア市長の依頼で公立女学校の教員に。先住民に日曜学校を開校
◆LM、恩赦を受け入れ、11 月初旬フランスに帰国
1881 年 ◆LM、数々の政治集会に招聘され演説行脚。小説『極貧』を発表
1883 年 ◎フェリー法：初等教育の義務付け（無償化）と非宗教化
◆LM、アンヴァリッドの失業者のデモに参加、逮捕拘束
（以下略。1905 年に LM 死去）

３．カルパンティエの自然誌とルイーズ・ミシェルとの出会い

慈善と神の代理としての懲罰を掲げる教会とは反対に、寛大さ、子供の意思の尊重、指導する側とされる側との相互の信頼関係を重視する教育方針のもと、カルパンティエは保育士養成[10]と並行して、『子供のためのお話と事物の学習』に日々の実践をまとめ上げた。序文には「保育所の子供に実際に語って聞かせたことのあるものばかり」[11]とあり、十分成果ありと確証できたものだけが提供されていたと考えられる。教本は子供に観察力や思考力をつけるだけではなく、保育及び初等教育の指導者、当時の社会が家庭の中に限って「子供の最良の指導者」と定義した母親、また特権的な教育資格を与えられていた修道女の一部に「実際には思うほどには易しくない子供との対話」[12]を学ばせ、彼らにも理性と知性を働かせて教育にあたる誇りを与えようとした。そのことをジョルジュ・サンド（1804-1876）は、2歳児程度にしかものを知らない18歳の女中に読み書きを教えながら「その年齢に見合う知性を獲得させ」「私自身も生徒と同じぐらい楽しい」と証言している[13]。

サンドと同様、パリの私塾教師ルイーズ・ミシェルも、カルパンティエの著書に恩恵を受けただろう。心の兄と慕い尊敬するヴィクトル・ユゴー（1802-1885）がカルパンティエの処女作を「本書が、わが国の学校の悪しき教育を良きものへ、欺瞞を真なるものへと変えることを希望してやまない」[14]と高く評価したのであればなおのこと、そう考えることができる。パリでもっとも貧しい地区モンマルトルの最下層の子供の教育を引き受けていたミシェルは、実際、上京してまもない寄宿学校の助教の頃から自らの手で動物小屋を建て、子供たちにヘビや小動物を飼育させ、それら動物の観察と写生の指導を行っている。

子供と並んで女性の教育もおざなりにされてきたことを意識したカルパンティエがペンをふるった教本、たとえば『砂粒の秘密あるいは自然の幾何学』（1863）にもミシェルは刺激を受け、多くを学んだだろうと思われる。幾何学や自然科学は抽象化能力の過度の発達を要求するものとみなされたため、庶民の子供に対するのと同様に女性にも不必要な学問とされ、時には有害であるとさえ考えられていた[15]。自由主義的貴族の「祖父」[16]のもと、生まれ故郷で人文学の教養は人一倍身につけていたが、自然科学に関しては、それが女子教育から除外されていた以上、女学校初等教育資格を得ても、ミシェルの知識は十分なものとは言えなかっただろう。

カルパンティエが保育士養成所の女学生のために執筆した『砂粒の秘密』は、日常生活や身近な自然界に存在するごく微小な事物に法則性のある形体をとらえ、線描を学ばせることを主眼としている。女性を戸外へと誘い、そこで幾何学と本格的なデッサンの技法を身につけさせようというのだ。後半には微小な「動物」である昆虫も取り上げられているが、この部分は6年後、初等教育用教本として大幅に加筆修正のうえ、多くの挿絵とともに『学校と保育所と家庭の動物学―視覚による教育』第5巻目に組み込まれることになる。

本書で興味深い点は、「蜜蜂は直線状の針で毒液をしたたらせるが、曲線からなる二つの器官では蜜を生成させるのではないか」[17]のように、目の前にありながら見逃しているものへの観察に加えて、その文章に豊かなイメージを髣髴させる詩的表現を盛り込んでいることである。そこにはカルパンティエの学生への教育的配慮はもちろんだが、彼女が若い頃に志していた詩人の資質と姿

勢[18]も見て取れる。たとえば『動物学』に綴られた「花の幸せや苦しみ」[19]という表現からもまた、カルパンティエにあって、科学的であることと詩的であること、観察と詩情とが、それぞれ決して矛盾するものではなかったことが理解されよう。

ミシェルもまた娘時代からユゴーを目標に詩人として身を立てたいと望んでおり[20]、カルパンティエとの共通性を見ることができる。しかし偶然の一致はそこまでである。後年、コミューン加担のかどでニューカレドニアへと流刑された時、ミシェルは祖国から遠く離れた野性的な地で失望も悲嘆もせず、当地の動植物、固有種の花バエ、イモムシ、クモ、あるいはイナゴに強い関心を抱き、観察から得た知恵を嬉々として語り[21]、赤珊瑚やニアウリをなど様々な植物を前に詩情をかきたてられている[22]。スケッチブックに詳細に描かれたツル植物の絵やニアウリの林、同志が眠る丘から見下ろす海岸の線描画も、彼女がカルパンティエの教育を継承していることを裏付けるのに十分だ。学校という教育活動の現場にとどまらず、文学的思想的な面でも、ミシェルがカルパンティエから何らかのことを学んだことは否定できない。

４．動植物の観察と人間・社会・未来に関わる思索

カルパンティエが自然誌の中でもまず動物学を初等教育に導入した理由には、子供に学ぶ楽しみを与え、彼らを科学の入り口へと誘う以外にも意味があった。『学校と保育所と家庭の動物学―視覚による教育』には、「勉強嫌いな子供も生の魅力に溢れた動物の表情に感動するのだから（中略）生の崇高さをできるだけ早い時期に、自分より劣ったものの中にも尊重できるように教え込まなければならない。そうすれば、子供はいずれそれ以上に、自分と同じものの中に生の尊厳を見出すことを知るだろう」[23]と記されている。「劣ったもの」は別の箇所では「下位の友達」（同書 3 巻目 p. 50）とも表現されるが、それが動物を指し、一方「自分と同じもの」があらゆる人間を意味していることは言うまでもない。

作品中にしばしば、人間が動物に与える不当な仕打ちや動物への憐憫の情が語られているとしても、公の場で動物虐待を禁止するグラモン法[24]（1850）が特に意識されたわけではない。そうではなく、カルパンティエには、彼女自身が元々教育を受けるにはあまりにも貧しい庶民の出自であったからでもあろうが、すべての子供、あらゆる人に備わる「知性と理性」をないがしろにしてはならない、無知という不毛な状況に置くべきではないという強い思いがあった。動物間の弱肉強食、寄生あるいは相互扶助の構図、時には愛憎の表現と思われる様々な情況の中に生きていることの価値を学ばせ、その学びを通して子供たちの「知性と理性」をより正しい方向に導こうとしたのは、その信念に突き動かされてのことである。それは、すべての子供の将来をより望ましいものへと変革させたいという希望であって、その願いがすべての物語の背後に一貫して流れている。

それだからこそ、『学校と保育所と家庭の動物学―視覚による教育』のゾウの項目には、それをかつて兵器として使った人間の愚行が語られ、「この動物を私たちの世の中の平和と調和のために活かす」ことが提唱される（同書 3 巻目 p. 104）のであり、スイス山岳地帯のカモシカの説明には後続してウィルヘルム・テルと当地の独立運動（同書 2 巻目 p. 72）が語られる。また「文明化を自称するフランス」の人が「醜い動物」としかみなさないラクダ、「愚かで頑固で鈍重な馬」とし

か理解していないロバに関して、それとは正反対の学ぶべき手本の一つとして、前者を「砂漠の舟」として大切に扱い（同書 2 巻目 pp. 120-138）、後者を手入れと訓練とによって「砂漠を疾風のごとく翔ける優雅な動物」に仕立て上げるアラビア人の知恵と文明（同書 3 巻目 pp. 57-69）が、詩人ならではの比喩の力を用いて謳われるのだ。ただひたすらに、より良い教育を探究してきたカルパンティエは、こうして本人もそれと気づかぬうちに、教育というよりも道徳哲学を世に問うていたことになる。

「神が動物に与えている本能は、多くの人間にも教訓となるのではないのか。なぜなら人間は理性を与えられてはいるけれども、何の秩序も経済観念もなく、自分が所有するものを浪費し、しかも神に与えられた人間としての価値に値するものを何らつくり出すことができないままでいる」（同書 5 巻目 p. 169）と述べるカルパンティエに、教会は不敬を嗅ぎつけ、権力の座を固守するブルジョワ保守層の方は、帝政打倒を掲げて次第に声を高く上げ始めた社会活動家と同種の不穏な思想を見出して、デュルイ失脚により後ろ盾を失った彼女に激しい誹謗中傷を始める。なぜならカルパンティエの語る神はユゴーの神に似ていた。また、いかなる活動よりも確実に、彼女の穏やかな言葉は民衆のもとに届いていたからである。

その頃、万国博覧会に狂乱したパリで、働く必要もなく消費にあけくれる少数の人と身を粉にして働くしかない大多数の人々という極端な階級社会を目の当たりにしながら、そのもっとも底辺にいる子供を相手に奮闘していたミシェルは、教育活動の傍らで社会活動にも力を入れていた。二つの活動は、彼女にとって分かちがたいものだった。ミシェルとは異なり、カルパンティエはパリ・コミューンに関してほとんど言及してはいないが、後年コミューン時代の「自由の夜明けとして共和国を防衛した女性たち」について語る際にミシェルは、カルパンティエの思想が彼女たちの活動と無関係なわけではなかったとほのめかしている[25]。

ミシェルはニュー＝カレドニアで、当地の先住民カナック族や、母国へのフランスの侵略に抵抗した罪でコミューンの人々と同様に流刑されてきたカリビア族の人々と、進んで交流を結んだ。このことは「コミューンの叛徒」の中でもほとんど稀有な例であったが、ユゴーを師と仰ぎ、カルパンティエの道徳哲学を共有していたのであれば、当然のことだったと考えられる。フランスの同胞が「劣等人種」「食人種」と蔑視した島の人々と親しく交わり、彼らから多くを学んだミシェルは、その観察と考察を『カナックの伝説と武勲詩』にまとめて帰国後に発表する。またフランスの植民者に抵抗運動を行ったカナック族の勇士アタイの最期を、彼女は『コミューン 歴史と思い出』の中で、ギリシア神話の英雄のように誇り高く描き出すだろう[26]。

カルパンティエが、動物の本能から聖書や聖人伝と同じほどの貴重な教訓を引き出せると教えたように、ミシェルは人間に侵されていないニュー＝カレドニアの懐[27]で、その自然を師として人間の条件について思考を深めていく。野生化しながら新しい習性を見につけたネコから、あるいはカルパンティエが「花の幸せや苦しみ」をとらえたように植物から、イナゴが嫌うトウゴマの秘策、強い樹液をもつ健やかなオリーヴの木、サイクロンにも折れることなく成長を続けるニアウリに、ミシェルは学んでいくだろう[28]。

「植物は環境の激変に挫けず，自ら新しい器官を備えた生物に構造を変化させて生き延びる。そ

れにくらべて人間は、本性として与えられているはずの自由をいかにして使うか，その方法さえ身につけていない」[29]とミシェルは考える。そして、人間は人間本来の自然をもっと信頼すべきであり、その姿を取り戻した時、あらゆる階級、あらゆる民族、あらゆる人間がユマニテ（人間愛）によって結ばれるはずだと確信し、彼女はアナーキストとしての人生を歩む決意を固めるのである。

５．おわりに

ミシェルはその後の東奔西走の遊説、身を削っての演説行脚の日々の中、自らをアナーキストと名乗った。だが、その形容が本当に適切かどうか、いぶかしく感じられるほどに、彼女の思想は素朴で近づきやすいものであったことが、その講演記録から読み取られる[30]。用いる表現はもちろん初等教育の指導者のそれであり、彼女の語り口は庶民に理解しやすく、頑固な先入観に染められていない魂には真直ぐ届くように思われる。それだからこそ、庶民階級はもとより、共和主義者、社会主義者、革命労働党員、アナーキスト、反軍国主義者、女性活動家、フリーメーソンなど人類の幸福に尽くそうとする様々なイデオロギーの党派が、いずれもこの女性を身近に感じ、この人物によってそれぞれが革命への情熱をかきたてられたのではなかっただろうか。

人間もまた自然の一部であるがゆえに、動植物を初めとする自然から学ぶべきことが数多くあること、一方で人間は知性と理性を備え、かつ本性として自由を付与されているからこそ、動物の世界に見られる弱肉強食は本来ありえないとミシェルは信じる。彼女が自らの半生を綴った『コミューン』の末尾をユジェーヌ・ポティエの詩『人食い』[31]で締め括るのは、その「真理」にもかかわらず人間の愚かさによって延々と続く偏見と先入観に支配された世界、人間の弱肉強食という呪われた時間を、過去のものとして封じこめたいがためではなかっただろうか。

本稿では自然誌をめぐって、それを初等教育、言い換えれば万民の教育に取り入れたパップ＝カルパンティエの道徳哲学を考察し、それがルイーズ・ミシェルの思想を進化発展させる土壌として働いたことを明らかにした。

カルパンティエに関してはコミューン以降に書かれた著作の分析、ミシェルについてはその小説『極貧』（1881）や彼女の遊説の講話を考察していく必要があろう。それらに関しては、今後の課題としたい。

注

[1] 溝井裕一（2014）『動物園の文化史―ひとと動物の 5000 年』勉誠出版、pp.126-133.

[2] フランス公教育の歴史については、以下複数の文献を参考にしてまとめている： DUBY, Georges. et PERROT, Michelle, eds., 2002. *Histoire des femmes en Occident*, Plon.；GALUPEAU, Yves. 1992. *La France à l'école*, Gallimard. ; LIÈVRE, Françoise et Claude. 1991. *Histoire de la scolarisation des filles*, Nathan. ; LUC, Jean-Noël. 1997. *L'Invention du jeune enfant au XIXe siècle – de la salle d'asile à l'école maternelle,* Paris, Ed. Belin. ; MAYEUR, Françoise. 1981. *Histoire générale de l'enseignement et de l'Education en France - de la Révolution à l'École républicaine*, Nouvelle

librairie de France. ; 岩崎次男 他（1974－1977）『世界教育史体系』vol. 9-10［フランス教育史］, vol.21［幼児教育史］, vol.34［女性教育史］、講談社.

[3] *Inspection générale de l'éducation nationale – Groupe de l'enseignement primaire*, IGEN, sept .2000 – janv. 2001, pp.2-3.

[4] *ibid.*

[5] 藤井穂高（1997）『フランス保育史制度史研究–初等教育としての保育の理論構造–』東信堂、p.127.

[6] BUISSON, Ferdinand. éd. de1911, *Nouveau dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire*, (http://www.inrp.fr/edition-electronique/lodel/dictionnaire-ferdinand-buisson/).

[7] PAPE-CARPANTIER, Marie. 1868. *L'Ami de l'Enfance*, in *Le journal des salles d'asile*, p.180.

[8] 1858 年当時の保育は保育所 Salle d'asile で行われており、その名称が示す通り、貧しい子供への慈善と保護とを目的としていた。ただし、その 10 年前、第二共和政発足時、文相カルノーがカルパンティエの協力を得て、それを共和主義的な初等教育第一段階の学び舎とする新しい考え方を示し、名称を保育学校 école maternelle（指導者は「保育教員」）と変えた時期があった。教会主流派とブルジョワ保守派の抵抗にあい、まもなく元の保育所に名称を格下げされるが、カルパンティエは教育内容そのものについては維持する姿勢を貫いた。ちなみに、それが再び格上げされ、現在のように保育学校と呼ばれるようになるのは 1879 年のことである。MAYEUR, Françoise, 1979. *l'Education des filles en France au 19e siècle*, Hachette, p.99.

[9] この関連年表は、注２、注６及び注８に挙げた文献に加え、カルパンティエとミシェルに関連する以下の書物にあたり、内容を整理したうえ作成したものである：

COSNIER, Colette. 1993. *Marie Pape-Carpantier – de l'école maternelle à l'école des filles,* L'Harmattan. ; COSNIER, Colette. 2003. *Marie Pape-Carpantier - fondatrice de l'école maternelle*, Fayard. ; GOSSOT, Emile. 1890. *Madame Marie Pape-Carpantier, sa vie et son œuvre*, Hachette. ; MAYEUR, Françoise. 1971. *Les évêques français et Victor Duruy - les cours secondaires de jeunes filles*, in *Revue d'histoire de l'Église de France*, T.5, n°159, pp.267-304. ; MICHEL, Louise. 1999. *La Commune – Histoire et souvenirs*, La Découverte. ;MICHEL, Louise. 1999. *Je vous écris de ma nuit, Correspondance générale, 1850-1904*, Paris-Max Chaleil.

[10] カルパンティエの保育士養成所の門を叩く女性の中には、修道女の姿もあった。修道女は当時、保育や初等教育の技能をもたないまま、修道院長が発行する特殊な教育免状 lettre d'obéidience により教育現場に携わることができたが、破門を畏れず、高い職業意識を備えた者もいたのである。COSNIER, 2003. *Marie Pape-Carpantier - fondatrice de l'école maternelle*, cit., pp.133-136.

[11] PAPE-CARPANTIER, Marie. 1858. *Histoire et leçons de choses pour les enfants,* Hachette, Préface-IV.

[12] *ibid.*, p.7.

[13] SAND, George. 1979. *Correspondance*, Garnier, tome XIV, p.744.

[14] GOSSOT, Emile. 1890. *Madame Marie Pape-Carpantier, sa vie et son œuvre*, Hachette, p.51.

[15] 楢原弥生（2003）「「女性リセの創設」と「女性の権利」」in 『規範としての文化—文化統合の近代史』（谷川稔 他）ミネルヴァ書房、p.291.

[16] ミシェルの母親が女中として仕えていた老侯爵。息子がミシェルの父親だとして、彼女を実の孫娘のように育んだが、彼女自身は、実の父親は当の老侯爵であったと告白している。MICHEL, 1999. *Je vous écris de ma nuit, Correspondance générale,* cit., p.49.

[17] PAPE-CARPANTIER, Marie. 1863. *Le Secret des grains de sable, ou la Géométrie de la nature.*, Hetzel, p.150.

[18] カルパンティエはラマルチーヌとユゴーの詩から詩作を独学し、女流詩人アマーブル・タスチュ夫人の支援を受けて、1840 年に詩集 *Préludes* を刊行している。COSNIER, 2003. *op.* cit.,p.48.

[19]「動物は感覚をもっているが植物はどうだろう。植物が幸せや苦しみを感じないと断言する人はよく考えてほしい。花は太陽に温められたり露で濡れたりする時、明らかに花なりに幸せなのだ。その証拠に彼らは花びらを開く。霜が降ったり行儀の悪い子供が折ったりすれば、花なりに苦しみ、その証拠に枯れてまもなく死んでしまう。植物と動物とを分けるのは簡単に見える。つまり動くか動かないか。しかし、これからお話する動物の中にはほとんど動かないままの、動物よりも植物に似ているものもある」PAPE-CARPANTIER, Marie. 1873. *Zoologie des écoles, des salles d'asile et des familles - Enseignement par les yeux,* 2e édition, Hachette, 1ère série, Préface-XIV.

[20] Cf. : 拙稿（2014）「ルイーズ・ミシェルの詩学」『島大言語文化』第 36 号、pp.45-66.

[21] MICHEL, *La Commune,* cit., pp.314-315.

[22] MICHEL, Louise. 2001. « Fleur de corail », « Sous les niaoulis », in *À travers la vie et la mort*, La Découverte, p.123, p.132.

[23] PAPE-CARPANTIER, *Zoologie des écoles,* cit., Préface-VI.

[24] イギリスの中産階級を中心に生まれた動物保護法の流れを汲む。Cf. :ジェイムズ・ターナー（斎藤久一訳）（1994）『動物への配慮』、法政大学出版局.

[25] MICHEL, *La Commune,* cit., p.118.

[26] *ibid.,* pp.329-332.

[27] ミシェルはニュー＝カレドニアから学び得たものを詳細に記録しており、その内容については次の文献に詳しい。Cf : MICHEL, Louise. 2005. *Louise Michel - exil en Nouvelle-Calédonie,* Textes rassemblés et présentés par Émile Cappella, Magellan & Cie. ; MICHEL, Louise. 2006. *Légendes et chansons de gestes canaques (1875) suivi de Légendes et chants de gestes canaques (1885) et de Civilisation,* Textes établis et présentés par François Bogliolo, PUL.

[28] MICHEL, *La Commune,* cit., pp.314-318.

[29] *ibid.*, p.315.

[30] MICHEL, Louise. 2005. *Prise de possession*, Jean-Paul Rocher.

[31] MICHEL, *La Commune,* cit., p.345.

引用・参考文献

BALZAC, Honoré de. 1963. *Le Père Goriot*, Classiques Garnier.

BUISSON, Ferdinand. édition de1911. *Nouveau dictionnaire de pédagogie et d'instruction primaire*, (http://www.inrp.fr/edition-electronique/lodel/dictionnaire-ferdinand-buisson/) 2017 年 3 月 3 日アクセス

COSNIER, Colette. 1993. *Marie Pape-Carpantier – de l'école maternelle à l'école des filles,* L'Harmattan.

COSNIER, Colette. 2003. *Marie Pape-Carpantier - fondatrice de l'école maternelle*, Fayard.

DAUPHIN, Joël. 2006. *La Déportation de Louise Michel* – Vérité et légendes, Indes savantes.

DUBY, Georges. et PERROT, Michelle, eds., 2002. *Histoire des femmes en Occident*, Plon.

藤井穂高（1997）『フランス保育史制度史研究−初等教育としての保育の理論構造−』東信堂.

GALUPEAU, Yves. 1992. *La France à l'école*, Gallimard.

GOSSOT, Emile. 1890. *Madame Marie Pape-Carpantier, sa vie et son œuvre*, Hachette.

岩崎次男 他（1974）『世界教育史体系―幼児教育史』vol.21、講談社.

ジェイムズ・ターナー（斎藤久一訳）（1994）『動物への配慮』、法政大学出版局.

川野辺敏 他（1977）『世界教育史体系―女性教育史』vol.34、講談社.

LIÈVRE, Françoise et Claude. 1991. *Histoire de la scolarisation des filles*, Nathan.

LUC, Jean-Noël. 1997. L'Invention du jeune enfant au XIXe siècle – de la salle d'asile à l'école maternelle, Paris ; Ed. Belin.

MAYEUR, Françoise. 1971. *Les évêques français et Victor Duruy - les cours secondaires de jeunes filles*, in *Revue d'histoire de l'Église de France*, T.5, n°159, pp.267-304. (http://www.persee.fr/doc/rhef_0300-9505_1971_num_57_159_1872.) 2016年10月10日アクセス.

MAYEUR, Françoise. 1979. *l'Education des filles en France au 19e siècle*, Hachette.

MAYEUR, Françoise. 1981. *Histoire générale de l'enseignement et de l'Education en France* - de la Révolution à l'École républicaine, Nouvelle librairie de France.

MICHEL, Louise. 1999. *La Commune – Histoire et souvenirs*, La Découverte.

MICHEL, Louise. 1999. *Je vous écris de ma nuit, Correspondance générale, 1850-1904*, Paris-Max Chaleil.

MICHEL, Louise. 2001. *À travers la vie et la mort*, La Découverte.

MICHEL, Louise. 2005. *Louise Michel - exil en Nouvelle-Calédonie,* Textes rassemblés et présentés par Émile Cappella, Magellan & Cie.

MICHEL, Louise. 2005. *Prise de possession*, Préface de Jacques LE GLOU, Présentation de Philippe FRECHET, Jean-Paul Rocher.

MICHEL, Louise. 2006. *Légendes et chansons de gestes canaques (1875) suivi de Légendes et chants de gestes canaques (1885) et de Civilisation,* Textes établis et présentés par François Bogliolo, PUL.

溝井裕一（2014）『動物園の文化史―ひとと動物の 5000 年』勉誠出版.

PAPE-CARPANTIER, Marie. 1858. *Histoire et leçons de choses pour les enfants,* Hachette.

PAPE-CARPANTIER, Marie. 1863. *Le Secret des grains de sable, ou la Géométrie de la nature.*, Hetzel.

PAPE-CARPANTIER, Marie. avril 1868. *L'Ami de l'Enfance (Le journal des salles d'asile).*

PAPE-CARPANTIER*, Marie.* 1873. *Zoologie des écoles, des salles d'asile et des familles - Enseignement par les yeux,* 2e édition, Hachette.

PAPE-CARPANTIER, Marie. 1879. *L'Introduction de la méthode des salles d'asile dans l'enseignement primaire,* Hachette.

SAND, George. 1978. *Correspondance*, Garnier, tome XIV.

谷川稔 他（2003）『規範としての文化―文化統合の近代史』ミネルヴァ書房.

内井惣七（2009）『ダーウィンの思想―人間と動物のあいだ』岩波新書.

梅根悟 他（1975）『世界教育史体系―フランス教育史』vol.9-10、講談社.

Inspection générale de l'éducation nationale – Groupe de l'enseignement primaire, IGEN, sept .2000 – janv. 2001. (http://www.education.gouv.fr/pid267)　2016年5月10日アクセス.

（島根大学教授）